

## 12・2 Fabry 病の母親由来リンパ球のクローン化と 保因者診断への試み（予報）

熊本大学医学部

松 田 一 郎

山 本 治 郎

赤 星 泉

### 目 的

Fabry 病は伴性劣性の遺伝性疾患と云われており、患者の母親は保因者になる筈である。また母親の皮膚培養細胞では $\alpha$ -galactosidase の活性を持つ細胞と、そうでない細胞がモザイクになっているのが証明されている。我々は母親由来のリンパ球をクローン化し、それについて $\alpha$ -galactosidase 活性をみることにより、保因者の確定診断することを目的とした。

### 方 法

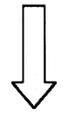
患者、母親から採血し、E. V. ウイルスを使用して株化し（多田班での報告を参考のこと）、それを 0.8% seaploque agarose 10 ml, RPMI 1640 10 ml, FCS 4 ml に加え total を 25 ml とし、25 個のプレートに分注する。

CO<sub>2</sub> インクベーターに入れて、培養観察しコロニーが出来たら、それを拾ってチューブに移し培養する。

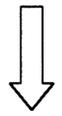
細胞が十分に増殖してくれば subculture して酵素活性に必要な細胞数とする。

### 結 果

母親由来のリンパ球の株化に成功し、これを使ってクローン化し、現在、6 株だけ分離することが出来た。さらに 10 株ほど分離し得たところで、酵素活性、電気泳動を行う予定である。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



## 目的

Fabry 病は伴性劣性の遺伝性疾患と云われており,患者の母親は保因者になる筈である。また母親の皮膚培養細胞では  $\alpha$ -galactosidase の活性を持つ細胞と,そうでない細胞がモザイクになっているのが証明されている。我々は母親由来のリンパ球をクローン化し,それについて  $\alpha$ -galactosidase 活性をみることにより,保因者の確定診断することを目的とした。